

大慈悲の表現

大慈悲即本願

われらは如来の大慈悲によつて救われる。しかし具体的には、大慈悲の本願によつて救われるのである。大慈悲は必ず本願となつて具体化せられるのである。大悲即本願、本願即大悲、「大慈悲の本願」といえば、大慈悲から顕われた本願、「大慈悲即ち本願」といえば、大慈悲とは事実本願より外ないことになる。大慈悲は必ず本願である。本願でない大慈悲は大慈悲ではない。それと共に本願でない大慈悲は大慈悲ではなくて小慈悲である。大慈悲は誓願であり、誓願は大慈悲である。したがつて本願は大慈悲の表現である。大慈悲はいかに表現せられ、いかに展開せられ、いかに成就せられるのであるか。これに答えるものが教えである。われらは教えを聞かなくてはならない。教えを聞くことはすなわち大悲本願を領解することである。

大無量寿経の別序には「如来無蓋の大悲をもつて三界を矜哀す。世に出興するゆえんは道教を光闡し、群萌を救い恵むに真実の利をもつてせんとおぼしてなり。」とあり、この文によれば、世尊が世に出でて本願の名号を説きたまうことそれ自体が、無蓋の大慈悲そのものの現われである。

聖人は教巻に「この経の大意は、弥陀誓いを超発して広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施すことをいたす。釈迦世に出興して道教を光闡し群萌を救い恵むに真実の利をもつてせんとおぼす。」と説かれた。弥陀は本願を超発して真実功德を衆生に廻施せんとし、釈迦は世に出興して、光闡道教と聖道門を説いて時機を調熟し、やがてこの経を説いて恵むに真実の利すなわち本願の名号をもつてせんとせられると説かれる。次に経の宗体を決して、「ここをもつて如来の本願を説くを経の宗致となす、すなわち仏の名号をもつて経の体とするなり」といわれる。大経が唯一の真実教と決判せられるゆえんがここにある。弥陀の本願を開顕することを経の宗要すなわち生命とする。それゆえに言々南無阿弥陀仏の名号それ自体である。すなわち如来真実の招喚名のみである。釈迦の教説でありつつ弥陀の本願名号そのものの表現である。二尊一致の真実教そのものである。

われらはこの真実教によつてはじめて本願を信樂し、大慈悲を感得することができるのである。すでに慈悲は感得するものであるといったが、大慈悲を感得することのできる眼を開くものこそ教えである。本願名号を聞くことによつて、本願名号を領解感得するのである。

仏と衆生

「設い我仏を得んに、十方衆生、至心に信樂してわが国に生まれんと欲し、乃至十念せん、もし生まれずば正覚を取らじ。」

いうまでもなく如来の王本願としての第十八願文である。大慈悲の廻向表現としてのこの本願の文字を、こと新しく頂くこととする。設我得仏は法蔵菩薩の願、大経において不取正覚の文字とともに四十八願ことごとくに見る言である。十方衆生とは、「十方衆生というは十方のよろずの衆生というなり」（銘文）。生きとし生けるも

の、諸有の衆生、迷いの衆生、生死するもの、有限なるもの、罪業深きもの、煩惱具足の凡夫、無明の海に流転するもの、言は変われども如来の本願によって救われずば、光なきもの、道なきもの、自覚なきものである。すなわち聖人が信巻三心釈において三度「一切群生海」とのたまうものである。これやがて如来本願海の対象界であり、本願の廻向顕現するところの大地であり、本願の蓮華の開敷すべき淤泥であり、本願の光の光被し摂取せんとする千古の黒暗である。

実に十方衆生こそは、その久遠の無明によって業苦に傷つき、限りなく罪悪生死にあつて自らの罪悪生死をいかんともするあたわざるものである。しかるにこの一切群生海をつつんで、その苦悩を自らの運命とするものすなわち大慈悲である。われら有限なる者は、他への運命の共感を持たない。私には運命の共感の能力がない。省みれば省みただけ、運命の共感の能力がない。このこと一つだけで無限の罪業が発生する。

大慈悲とは実に無限の運命の共感の能力である。一切衆生の運命すなわち弥陀の運命である。法蔵菩薩とは誠にかくして久遠実成の弥陀が、その弘願大船上に一切衆生を満載し、つつみ、大悲同感したる従果向因の名である。如来なるがゆえに菩薩となる。従果向因して菩薩とならざるものは仏ではない。仏なるがゆえに菩薩となり、菩薩なるがゆえに仏と成らんと誓う。

畢竟、設我得仏とは、仏が仏にならんと願である。願とは、仏が仏になり、われがわれとなることである。この仏の本願がやがてわれらの上に生きてもまたそうである。人をまことに人にし、男をまことに男にし、女をまことに女となし、われをついにわたらしためたまうのである。それゆえに願は純化せられることによつて必然に成就するのである。

今、設我得仏十方衆生と、如来の願は十方衆生を抱いての願である。十方衆生がなければ如来の本願はない。衆生の無明の大夜は実にかくして本願生起の大因である。はてしなき無明生死の大海の展開は、同時にまた如来本願海の展開の唯一の因由であった。設我得仏の仏は南無弥陀仏、一つ南無弥陀仏が仏にあつては正覚、衆生にあつては往生、正覚即往生、衆生はやがて名号を聞信して往生成仏するのである。

仏の誓い

「設いわれ仏を得んに十方衆生、至心に信樂してわが国に生まれんと欲し、乃至十念せん、もし生まれずば正覚を取らじ。」

「設いわれ仏を得んに十方衆生」とは法蔵菩薩の願、成仏の願、十方衆生の流転の運命を抱いての弥陀仏の願、名号成就の願、仏なるがゆえに仏に成らんとする願であることを述べた。

しかるにこの本願文の終りに、「もし生まれずば正覚を取らじ」と誓われた。『尊号真像銘文』に「若不生者はもしむまれずば」という言なり、不取正覚は仏に成らじと誓ひたまへるみのりなり。」と解釈せられた。若不生者不取正覚とは仏の御誓いである。仏の御誓いは若不生者の御誓いである。十方衆生がもし浄土に生まれずば正覚は取

らない。ここにおいて設我得仏は願、不取正覚は誓、十方衆生は弘、十八願を本願といい、弘願といい、弘誓願といい、本弘誓願とよばれるゆえんである。

若不生者不取正覚とは誠に如来の御誓いである。十方衆生がもし生まれずば正覚を取らじとは、十方衆生の無明流転の運命をわが運命と大悲同感したまう仏が、それゆえに衆生が、浄土の大衆となり、往生成仏するにあらずば仏の正覚は成就しないのである。親の運命は子の運命によつて決する。子がもし苦悩すればそれ自体親の苦である。子がもし助からずば親は助からない。願の自利成就是誓いの利他成就である。利他成就せずば自利成就せず、自利成就せずば利他成就はない。願作仏心は度衆生心により、度衆生心は願作仏心によりて成ぜられる。この自利利他一如の具体化こそ本願名号である。若不生者不取正覚とは、まさしくかくのごときの大悲眞実を表現する唯一の言である。

本願の三心

しかればかくのごとき誓願はいかにして成就し、いかなる相において実現せられるのであるか。これを大経によつて頂けば、仏の誓願は法蔵菩薩の兆載永劫の修行によつて成就せられると説かれる。兆載永劫とは無限の時、永遠の時である。永遠を貫くものは眞実である。乃至一念一刹那も眞実ならざることなく、清浄ならざることなき眞実のみが本願の能成者である。

眞実、眞実とは誠に如来である。如来とは誠に眞実である。しかるに今、十八願文には、至心、信樂、欲生と誓われた。この至心信樂欲生の三心を本願の三信、または三本願の三心といわれるものであるが、これこそ先にいうところの「眞実」の具体的表現である。長時永劫、永遠の時を、三心によつて修行成就して、南無阿弥陀仏の名号を成就したもうたのである。

本願の三心は能成の眞実心であり、名号は所成の果徳のすべてである。三心は能成の因、名号は所成の果、本願や名号、名号や本願、本願を離れて名号なく、名号を離れて本願はない。したがつて本願の三心は名号の内的光景であり、名号は本願の表現である。

実に至心信樂欲生我國なる八文字こそ、如来久遠の大悲眞実の具体的表現である。わが聖人をして御本典に信巻を書かしためたのもこの大文字であつた。われらの終生かかつて頂くべきものも、また、この三心、体解感得すべき最勝眞妙不可思議の唯一絶対の大文字である。三心において外に本願なく、大悲なく、眞実はない。如来心とは本願の三心である。しかるにわれら、聞其名号信心歡喜と眞実教を聞いて、捨つべきを捨て、壞すべきを壞しきつて、その底に現われる信心の自覚もまた三心即一心の信樂である。かくして三心は、無限にして絶対なる如来大悲眞実の表現であるとともに、われら衆生の信心の具体的相である。これすなわち絶対他力の宗教の本質である。であるから漸を追つて詳述するであらう。

乃至十念

「至心に信樂してわが国に生まれんと欲し、乃至十念せん……」と、三心について乃至十念と誓われた。至心信樂欲生の三心は要するに信であり、乃至十念は行である。つまり信と行とを誓われたのである。

『銘文』に「乃至十念と申すは如来の誓いの名号を称えんことを勧めたまうに遍数の定まりなきほどをあらわし、時節を定めざることを衆生に知らしめんと思召して乃至の言を十念の名にそえて誓いたまえるなり」と説かれてある。乃至という言葉は、数を示す時、五本乃至十本というように、一定しない場合に使われる言である。しかるに今は下を示し上を略して乃至十念と誓われたのである。本願の文字であるから如来の大慈悲の表現された文字でなくてはならない。十念とは『唯信鈔文意』に「十念というはただ口に十遍を称うべしとなり」とあつて、南無阿弥陀仏と口に念仏を称えることであり、「念と声とは一つ意なり、念をはなれたる声なし、声をはなれたる念なしと知るべし。」(唯信鈔文意)。即ち念声は一を示されたのである。これ善導、法然、親鸞の三聖一貫のお示しである。

であるから、乃至十念とは、名号を称えよ、と誓いたまうに、その遍数と時節とを限定せざることを示されたのである。念仏の数の多少はその根機と寿命の長短によるのである。根機の立派な人はよく念仏するし、根機の劣つた者は数が少ない。如来は数を条件に誓われたのではない。いかなる衆生をも救わんとの大慈悲が、念仏の易行を廻向して、いかなる衆生をも救わんとせられるのである。

聖人が『一多証文』に、一念多念のあらそいを取り上げてさまざまに御文を引いて後「これにて一念多念のあらそいあるまじきことは推し量らせたまうべし。浄土真宗のならいには念仏往生と申すなり、またく一念往生・多念往生と申すことなし、これにて知らせたまうべし。」と説かれたことは明らかに頂戴すべきである。

「浄土真宗のならひには念仏往生と申すなり」。念仏は如来救済の誓願であつて、救いの条件ではない。救済それ自体である。大慈悲の具体的顕現そのものである。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」、これが歎異鈔二章における法然上人の教えのすべてであり「よき人の仰せをこうぶりて信ずる外に別の子細なきなり」が親鸞聖人の領解のすべてであつた。しからば信と行とはいかなる関係があるのであるか。

信と行

本願の御誓いは至心信樂欲生我國の信と、乃至十念の念仏行と、つまり信と行との廻向にあることを示されたのであつた。至心信樂欲生の三心は信樂の一心を開かれたもの、つまり信心の徳義が三心である。そのことは後に述べる。三心即一心の信心である。乃至十念は、称名念仏の行である。そこで信と行とが本願の御誓いの具体相である。信心決定して念仏申す、念仏申すまが信心決定、それがそのまま本願の廻向表現である。

今本願文には、信行次第となつてゐる。しかるに御本典には教行信証とあつて、行信次第となつてゐる。これはなぜであらうか。これは廻向する仏身に約せば行信次第し、廻向を領受する衆生の立場においては信行次第するのである。すなわち行者に

とつては、教えを聞いて信ずるのであり、信じてすなわち称えるのである。しかし教えを聞くとは、聞其名号のいわれを聞き開くのである。そこで教行不二と申して教えはそのまま行である。

名号によつて成道せる諸仏の名号の讃嘆こそ真実教である。これを現わせるもの十七願諸仏称名の願である。この十七願界における、「無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう」、その名号を聞いて行者は信心歓喜するのである。十七願諸仏称名の願によつて名号の不行を開きたまうのが今家独特の法門である。

すなわち十方諸仏はすべて南無阿弥陀仏の名号であり、釈尊も南無阿弥陀仏、七高僧も南無阿弥陀仏、聖人も南無阿弥陀仏、同行善知識すべて名号六字、一がみな南無阿弥陀仏、すべてが一南無阿弥陀仏、この十七願海の春爛漫の花の中に包まれて、はじめこれを内に受け取つて十八願の信心となるのである。客観界には十七願、主観界には十八願、十七願を離れて十八願なく、十八願を離れて十七願は無い。これを二願不離、行信不離不二というのである。十七願が名号の不行、この十七願の名号が三国七祖の上に歴史的事実として展開されており、この名号の巨流を受け取られて、親鸞聖人の上に十八願の信心となり行となる。この信心の智慧がかえつて、三国七祖の伝統歴史を發見せしめたのである。

かくして、教えはそのまま行である。教行不二であるがゆえに、教えを受けとることとはそのまま名号の不行を受け取ることであつて、行者の上に信を成就し乃至十念の念仏行を成ずるのである。宗祖はこの十念の念仏行をそのまま十七願の上に見られたのである。すなわち一度称うれば称うるままが十七願海へ入るのである。諸仏の5行を行ずるのである。「不行とは無碍光如来の名を称するなり」と、行巻の巻頭に具体的な行相を示されたのであるが、称名行のままが十七願の不行である。

かくして久遠の大慈悲は名号の不行となつて法界に具体的となるのである。名号とは誠に本願の具体化、本願は大慈悲の自己形成、大慈悲はついに名号の不行となつて自らを無善造悪の衆生界に廻向表現したまうのである。

廻向の物体もつたい

『一念多念証文』に「至心二廻向シタマエリ」を釈して「廻向は本願の名号をもつて十方衆生に与えたまう御法なり」と言われる。これ如来の廻向の物体はただ名号の不行以外にないことを示されるのである。行巻には、「謹んで往相の廻向を按ずるに大行有り大信有り」といわれ、信巻には、「謹んで往相の廻向を按ずるに大信有り」と現わされてあるが、先に述べるがごとく、行信不離不二であるから、名号の不行を除いて外に信心の体があるのではない。

火を離れて、熱いという感じはない。身に焼けついて熱いのは火にその力があるのである。身から出たのではない。名号の外ほかに信の体はない。信は衆生の機の事実である。衆生衷心の信心歓喜である。足を運んだのも苦しんで求めたのも、ついに聞き開いて信心決定して、あるいは喜び、あるいは泣き、暗い胸が明るくなった、苦しかった心が楽になった等々、すべて行者自身の衷心の願心となつて開いて来た、まがう方なき衆生の主観的事実でありながら、しかもこれを廻向といわれるのは、不行の

廻向以外に大信はないからである。名号の大行を受領したのが、すなわち衆生の信である。ゆえに『一多証文』に「本願の名号をもて十方の衆生に与えたまう御法なり。」と仰せられるのである。梅の廻向の外に酸味の廻向はいらない。酸いというのは舌である。しかし舌から出た酸味ではない。

大行は法、大信は機、如来は衆生の機を成じたもう。大信心こそ行者の正銘真実の心である。私が私の心と思う心よりも、より本質的な心、貪欲よりも、瞋恚よりも、もつと根本的な私の心である。われらは念仏の人において、ほんとうの人に会うのである。三毒はわれと自ら発しつつわれを苦しめるいやな心、信心は発れば発るほど満たされ喜ぶことのできる明るい心である。如来の教法はかくして衆生の機を成じたまうのである。

ゆえに信は衆生の機でありながら廻向といわれる。この信いよいよ純粹無雜であればあるほど、そのまま大行界裡の事実である他力である。大行は法、大信は機、機法その体ただ南無阿弥陀仏の大行、この大行の廻向そのままの大信である。ゆえに行信ともに如来廻向、法体成就というといえども、今日は大行を、明日は大信をというが如き二つのものからではなくて、大行を廻向するところ、すなわち機において信となる。これを信ずる心も廻向といわれるのである。ゆえに行には必ず信を孕み、信には必ず行を具足するのが真実本願の宗教の世界である。

行信行

すでに廻向のものからは名号より外ほかにはない。名号を説ける教えを受け取ること6がそのまま信である。すなわち如来にあつては行信の次第となることを述べた。しかるに、本願文に至れば、それが三信十念と信行次第となっている。これ衆生にあつては、名号の大行を聞其名号信心歡喜と受け取つて信心を成就し、その信心はそのまま念仏行となつて現われて来るのである。すなわち信行次第するのである。そこで行信次第に機に領受し、やがて信行次第に流出する宗教の全き相は、行信行となるのである。

初めの行は『六要鈔』に所行能信といわれるところの所行であり、また所信であり、後の行は衆生の能行である。所行そのまま能行、この所行そのまま能行、能行そのまま所行こそ、行巻に示されたる大行である。

「大行とはすなわち無碍光如来の名みなを称するなり。」

称無碍光如来名、すなわち称名である。十八願の乃至十念の報恩行としての称名である。しかし称名は行者の口に出る単なる声ではない。無碍光如来名を称するのである。それ自体独立する無限絶対なる無量寿如来の名号である。しかるにこの称名は、これを口にせんとすれば幼児といえども可能であり、嘲笑的にでも口にすることができがゆえに、これを称えるということになんらの価値を認めない称名となりやすい。

しかるに、称無碍光如来名の大行であつて、称えることによつて具体的に衆生の能行とはなるが、無碍光如来名に重点をおいて称無碍光如来名を見れば、実在そのままの如来である。いわゆる名体不二の真実在、価値(名)即実在(体)の名号そのまま

の顕現せる称名である。わが上に具体化された称名そのままが所行所信の大道である。であるから、行巻は信巻がための所信であるといわれつつ、衆生の乃至十念の称名をそのまま十七願にとり来たつて「大道とは無碍光如来の名を称するなり」と能行そのものを十七願所行位にあげて示されるのである。

他力宗教の原理

多くの聞法者たちにとつては、本願を信ずるということはわかっても、信の上に何ゆえに念仏しなければならぬかという疑問がおこるようである。これは全く行信の次第がわからないためである。すなわち大道たる如来の名号を離れてはついに何ももないのである。大無量寿経、すなわち真実教のすべては、言々名号より出で、言々名号に納まるがゆえに、一字一字名号であり、一句一節みな名号そのものである。円い輪のいずれの点をおさえても、輪そのものであり、初めにして終りであるが如く、一字に全体を収め、一言に全体を顕現する。

しかるに願と言えば行を忘れ、智慧と言えば慈悲をきりはなし、真実と言えば清淨とは別に思われ、功德莊嚴と言えば、如来をぬきにするがごときは、ついに自力無明の疑惑、凡夫の邪智のいたすところである。本願というもすべてであり、慈悲というもすべてであり、ついにいかなる言々句々も全体を収む、この全一なる体徳すなわち名号である。ゆえに、名号をもつて経の体とす、と言われるのである。かくて昼夜百千万劫説かれるといえども、ついに一名号より外何ものもない。

名号こそ彼岸のすべてであり、如来の身代限りであつて、絶対無限なる如来浄土のこの世にあつて下さる唯一の相である。もし名号の宗教でなかつたならば、それは畢竟、哲学にすぎない。百千の教説は、教説のまま記憶し保たなくてはならない。しかるに名号の宗教なるがゆえに、百千万の教説も南無阿彌陀仏の一名号として念持せられるのである。これすなわち、名号の宗教、易行の宗教、廻向の宗教の成立の原理である。

「弥陀の本願と申すは、名号を称えん者をば極樂に迎えんと誓わせたまいたるを深く信じて称えるがめでたきことにてせうろうなり。」（末燈鈔）

この聖人の御文の前半、「名号を称えん者をば極樂に迎えん」までは誓願を説かれたものであり、「深く信じて称える」とは衆生の信と行とを示されたものである。すなわち、本来弥陀の本願なるものが、「名号を称えんものをば極樂に迎えん」ということであるがゆえに、本願を信ずるとは「名号を称えてくれ、名号を称えてくれるならば、浄土に往生する。もし名号を称え往生しないならば、正覺は取らない。」というのが如来の誓願である。かくて念仏は大悲誓願の行である。大慈悲の具体的表現は念仏であつたのである。

であるから、本願は信ずるが念仏は称えないということは無意味である。その信ずる本願が「名号を称えん者をば極樂に迎えん」という本願なるがゆえである。かかる本願を「深く信じてとなふるがめでたきことにてせうろうなり。」かくて今の文こそは、「名号を称えん(行)者をば、極樂に迎えんと誓わせたまいたるを深く信じて(信)、称うるが(行)めでたきこと、」と行信の次第が示されたのである。

一実真如の功德大宝海たる名号の大行は、衆生の聞名を通して、久遠劫来の我執、疑惑、自力の岩を粉碎し円融して大信を成じ、ついに、そのまま口業に顕れて念仏称名となる。説けば行信行と言うといえども、ただこれ名号の大行の外何ものもないのである。このゆえに行には必ず信をはらみ、信には必ず名号念仏を具するのである。

本願成就文

本願の文についてはさらに詳説しなければならないが、私は順序上、本願成就文について頂くことにする。

十八願成就文に言わく。

「諸有の衆生、其の名号を聞きて信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまえり。彼の国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と正法を誹謗せんとをば除く。」

右の文はいわゆる、十八願成就文であつて、如来全一の功德を衆生のものにしていただくたった一つの相、たった一つの道である。本願が弥陀仏の領域であるに對すれば、本願成就文は、釈迦諸仏の世界である。

諸有衆生とは、本願文の十方衆生である。諸有とは、有とは迷い、諸有は三界六道の迷いの世界、また、諸有をあらゆると読めばすべての衆生のこと、そこで諸有衆生とは、迷いにある十方一切衆生のこと。『一念多念証文』には「諸有衆生というは十方のよろずの衆生と申す意なり。」と釈せられた。誠に十方衆生こそ、無条件に仏の大慈悲によつて救われ、大悲本願によつて覺醒して眞実信心に生かされ、それによつて、如来莊嚴浄土の大願に帰入し、やがて如来の内眷屬として浄土の菩薩たるべきものである。如来はその本願において、「たといわれ仏を得んに十方衆生よ」とよび、今成就文においては直ちに諸有衆生と示されるのである。

聞其名号信心歡喜

「諸有衆生、其の名号を聞いて、信心歡喜し、乃至一念せん。」

聞其名号……その名号を聞く、これこそ一切衆生の助けられてゆく唯一の道である。竜樹、天親の二菩薩をはじめとして、七高僧も親鸞も、すべての聖賢はもちろん、億々の念仏の諸大士はことごとく、この聞其名号によつて生まれてきたのである。

名号を聞くとは、名号のいわれを聞くのである。名号のいわれとは、総じて言えば四十八願、別して言えば十八願、この本願こそは名号の内的光景であり、如来大悲の因相である。であるから、聖人は一多証文に釈して「聞其名号というは、本願の名号をきくとのたまえるなり。きくというは本願をききて疑う心なきを聞かうなり。また、きくというは信心をあらわす御法なり。」と仰せられた。名号を聞くとは、本願を聞くことであり、聞いて疑う心なく信ずることを聞かうのである。

次に聞其名号の其とは何を指すのであるか、それ大經下卷の文を見ると、この成就文の前に、いわゆる十七願成就文がある。言わく、

「十方恒沙の諸仏如来は、皆ともに無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう」と。

それに引続いて「請有の衆生、その名号を開いて」と出てくるのである。聞こうとすれば説かれてあらねばならない。その教えの聞こえて来る本を、十七願諸仏称名の願といわれるのである。十方諸仏を諸仏たらしめ、諸仏によつて称えられ讃嘆されているところの、その具体的なる名号、人格の上に具体的なる名号を聞くのである。

十七願と十八願

聖人は御本典において教行信証の法門を開宗したまうに当たつて、行巻をばこの十七願によつて開きたまい、次の信巻をば十八願をもつて開きたもうたのである。大經の翻訳家は四十八願を説くに当たつて何食わぬ顔で願を羅列し、下巻において成就文を出すに当たつて、ただ今述べたがごとく、十七願成就文と十八願成就文とを「其の名号」と指摘することによつて、二願の不離を示し、後世人有つて真にこれを読破するにまかせた。はたせるかな、わが聖人に至つて、二願不離、行信不離の法門、真宗念仏の論理を建立せられた。

奏でられない音楽を聞くことはできない。説かれない法門を聞くことはできない。十七願界において讃嘆せられるその名号を、沈然して聞くとところに自ら十八願海は開けて来る。このことについては、すでに信と行との關係を述べる時言つたがごとく、釈尊、七高僧、億々の念仏の行者、すべて南無阿弥陀仏の名号であつて、客觀界は十七願、それをそのまま主觀界に受け取つて十八願。十八願が拝む客觀界が十七願、いかにして受け取るか、聞其名号信心歡喜と受け取るのである。

憶うに必墮無間と墮落に墮落をつづけたる人類は、決して哲學的思弁や、瞑想によつて救われるのではない。五濁惡世の様相を少しくらい模様変えたくらいで救われるのではない。地獄一定のありのままが、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、……全我を賭して大信心海に入ることができたのは、それは本願名号に生ききつたよき人、法然上人の在いましたげゆえである。真人格と、それより流れ出る教説への絶対信順の契機なくしてどうして「親鸞一人がため」という大決断に至ることができよう。十七願界無視の念仏は、抽象孤立、独断偏見の迷情にすぎない。

信心歡喜

「聞其名号 信心歡喜 乃至一念……」

聞其名号、名号に内在する本願のいわれを聞くこと、それより外に一切衆生の助かる道はない。すなわち大無量壽經、真実の教えを聞くことが、一切衆生の救われゆく唯一の道であることを頂いた。しかるに「きくというは、本願をききて疑う心なきを聞というなり。またきくというは信心をあらわす御法なり。」(一多証文)とあり、真に聞いたとは信ずることである。

いわゆる、聞即信である。教主のみ教えを聞くままが弥陀の本願を信ずるのである。信心とは帰せよとの教命のままに順い申すのである。

「婦命はすなわち、釈迦、弥陀の二尊の勅命に順い召しにかなうと申す語なり。」(銘文)、

まことに聞くとは、信順することである。二尊への信順そのままが白道である。無条件にみ教えを頂くのである。み教えは無限なる如来そのまんまのみ声である。ゆえにみ教えを拒む者は大慈悲を拒む者である。最も直接なる大慈悲はみ教えである。聞其名号信心歡喜は大慈悲の具体化、大悲廻向の全貌である。聞其名号すなわち大慈悲である。

ある時、一連院秀存師が香樹院の御客になって酒など頂いていた。香樹院師は法義の話を言われていわく、「およそ人々はわが心中をこしらえることにかかりておるゆえ、その心中はこしらえものである。教える人もただ理屈のみ教えて造ることに骨を折るのである。ただ、信心とは聞其名号信心歡喜の八字をわが腸とするばかりであるのに、そう思う人がはなはだ少ないのは残念である」と。すると、秀存師が「ただ仏の力一つにて助けたまうぞと信ずる外に聞其名号という事もなしと聴聞いたしております。」といわれると、師いわく「それでよし、それでよし。」(秀存語録一一〇則)信心歡喜とは、まことに流転の子が、今、生々世々の初事に、真実、真実大悲に遭遇したのである。運命の一大転廻の時が来たのである。無限の如来のみ、もの言いたまいて、自我の一切のはからいになんらの価値も見いだせない。われにあるものは、われとわれを滅ぼす無明煩惱のみであることを知って、曠劫以来の宿業のすべてを無有出離之縁と信じて、大悲真実の中につつまれ、円融無碍と救いあげられる全我的なる宗教体験のすべてである。

一念多念証文にいわく、「歡喜というは歡は身をよろこばしむるなり。喜は心をよろこばしむるなり。得べきことを得てんずと予てさきよりよろこぶ意なり。」と。歡喜を正信偈には「慶喜一念」とあり、「歡喜はうべきことをえてんずと先だちてかねてよろこぶ心なり。……慶はうべきことをえて後によるこぶ意なり」(一多証文)。歡喜と慶喜の一つなるところの本質的なよろこびを得るのが聞其名号信心歡喜である。真のよろこびであり、永遠のよろこびである。ここにおいて御本典の流通分には、「慶しきかな。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思之法海に流す。深く如来の矜哀を知りて良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜弥至り、至孝弥重し。」と嘆ぜられた。大慈悲の廻向表現はかかつて、聞其名号信心歡喜にあり、これより外に大慈悲もなく、如来本願もありえない。

乃至一念

「乃至は多きをも、少なきをも、久しきをも近きをも、前をも後をも、みなかねおさむる語なり。一念というは信心を得る時のきわまりをあらわす語なり。」(一多証文)

この成就文の一念は信の一念である。本願文の十念は行であり、大経流通付属の文の「それ彼の仏の名号を聞くことを得る有りて、歡喜踊躍し、乃至一念せん云々」の一念も行の一念である。今この本願成就の乃至一念のみが信の一念である。

乃至一念の乃至は、多少、久近、前後を皆かね撰めたことばであると釈せられた。この一念こそ永遠に純粹持続し等流して願往生する信の、その初起の一念である。ゆえに信巻末の初めには、「夫れ真実の信樂を按ずるに、信樂に一念有り、一念とは斯れ

信樂開發の時剋之極促を顕し、廣大難思の慶心を彰すなり。」と仰せられた。一念の体性は廣大難思の慶心であり、その開發の時の至極を一念と言われたのである。ゆえに一念は一心の信心そのものである。

ゆえに、「一念と言うは信心に二心無きがゆえに一念と言う。これを一心と名づく。一心はすなわち清浄報土の真因なり。」とも釈せられるのである。ああ、聞其名号、信心歡喜、乃至一念とは、これすなわち行者の上に開けたる宗教生活の最初にして最終なる具体的事実の端的であるが、そのまま永遠常住にして大悲真実なる如来本願の、生死界への廻向顕現に外ほかならないのである。表から見れば、衆生の宗教的自覚であるが、裏がえせばそのまま一南無阿弥陀仏、如来大悲そのままのものである。

至心廻向

「聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心廻向……」わが聖人はこの「至心廻向」の文字を「至心に廻向したまえり」と訓よまれた。この訓み方は誠に古今独歩のものであつた。もしこれを「至心に廻向せよ」と訓んでも、「すべし」と訓んでも、すべて行者の自力廻向となるであろう。しかるにこれを「至心に廻向したまえり」と訓むことによつて、如来の大悲廻向を現わす文字となり、浄土真宗全体の性格を決定する確固たる教証となつたのである。

聖人の真宗は「廻向の宗教」といわれる。往相廻向、還相廻向と、行者の宗教生活の一切はことごとくあげて如来大慈悲の廻向表現に外ほかならない。浄土への往相における真実の教行信証は、すべて大悲廻向の具体的事実である。やがて還相大悲の活動もすべて如来本願のたまものである。かくのごとき廻向の宗教の根源を、この成就文、至心廻向の文字の上に発見したもうたのである。

聖人は何ゆえにこの四文字を他力表現の文字と見たもうたのであるか。そもそも二廻向の宗教の体系は、曇鸞大師の論註の五念門の宗教によりたまひ、大悲廻向の意趣は、同じく論註の三願的証の法門に依りたまふことは明かである。すなわち十八願によつて信を、十一願によつて証を、二十二願によつて還相化他を明かされた、鸞師の幽意を得たもの、すなわち聖人の絶対他力廻向の宗教である。今、至心廻向の文字を頂きたまうに当たつて、わが聖人の信眼には、これを、至心に廻向せよ、とは訓めなかつたのである。至心に廻向したまえり、とよむより外ほかに、訓み方はなかつたのである。この四文字を全我をもつて体解なさつたのである。

三經一論の帰結するところ、あつき如来大悲の心に徹するところ、七祖の伝統の歴史的意義の帰するところ、そもそも宗教的真理の命ずるところ、道の本質の直観されるところ、信心の智慧の体感するところ、至心に廻向したまえりと訓むよりほか、ついに道はなかつたのである。しかしてかく訓まれることによつて、今まで明らかでなかつた浄土の宗教の面目は、ついにその最後の段階に入つて、究竟的真実の相を顕現したのである。それがすなわち教巻々頭の、

「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり。一には往相、二には還相なり。往相の廻向について真実の教行信証あり。」との真宗の体系となつたのである。

成上起下

この至心廻向の四文字を『願願鈔』には「成上起下の文」といつてある。その意は、上ヲ成ズとは、上の聞其名号信心歡喜は、全く如来の至心に廻向したまえるものであつて、凡夫自力のはからいによつておきたものではないということ。名号を聞信するままが如来大悲の廻向であるというのである。誠に聞其名号信心歡喜のままが大悲の具体的な廻向の事実である。

さらに下ヲ起スとは、下の即得往生住不退転、すなわち信因より起こる証果、名号を聞信する一念に即得往生と正定聚の位に入り、不退転に住して大涅槃の証果に至る。そのすべてが至心廻向したまえるものであつて、この至心廻向によつて起こつたものであるとのことである。誠にもしは因、もしは果、一事として如来廻向のものでないものはあり得ない。今、成就文において、この至心廻向の文字が中心に位して、上、信因も、下、証果も、全く至心に廻向したまえることを示す文字だといわれるのである。

本願三心と成就文

本願文に信を誓つて、至心、信樂、欲生我国の三心とせられた。この三心は、この本願成就文にはどこに出ているのであるか。まず信樂の二文字が成就文には信心歡喜の四文字として開かれてあることは明らかなことである。信樂とは行者の機、眞実教を聞いて開發する信心歡喜である。次に至心回向の至心とは、本願文の至心そのままであるが、本願文の欲生は成就文のいずれの文字に相当するのであろうか。古来それは、至心廻向とは至心欲生である、と決定せられた問題である。

本願文の欲生とは、「すなわちこれ如来諸有の群生を招喚したまう勅命なり。」と信巻において釈せられ、さらに衆生に眞実の廻向心なきことを明かされて、如来大悲はただ廻向にあることを決して、ついに、「欲生はすなわちこれ廻向心なり」と示された。「わが国に生まれんと欲え」との招喚はそのまま廻向である。招喚より外に廻向の物体はない。南無阿弥陀仏の招喚は、そのまま南無阿弥陀仏の廻向である。招喚そのままが廻向、正法を聞信するとは如来本願の招喚を聞くことである。名号を聞いて信心歡喜するとは、名号の招喚を聞くことであり、そのまま名号を廻向されることである。

かくのごとく領解する時は、至心廻向とは至心欲生である。至心とは、至とは眞なり実なりで、眞実誠のこと、如来久遠のまごころである。大悲の眞実である。眞実は限りなく与えんとする。如来とは眞実である。しかれば如来は何を与えたまうのであるか、それは如来のすべてである。如来は如来のすべてを与えたまう。如来は眞実であるがゆえに、眞実は、眞実のすべてを与えたまうのである。如来はその方便法身のすべてである本願の名号を廻向したまうのである。

本願というも、名号というも、眞実というも、大慈悲というも、智慧光というも、無量寿というも、すべて別のものではない。すべて、名号そのものである。至心廻向とは、至心によりて至心を廻向する。その廻向を領受したままが「信心歡喜」の信樂で

ある。であるから今の場合、至心と欲生（廻向）は如来に、信樂は衆生の上に見るといえども、三心はそのまま一心であるがゆえに、信樂は至心信樂であり、欲生はやがて行者の信に内在する願往生心となる。すなわち三心とも行者の上にあるのである。

「欲生我国というは、他力の至心信樂をもて安樂浄土に生まれんと思えとなり。」

この御文を気をつけて拝読するがよい。まず終りの「と思えとなり」の言を中心と見れば、この文全体が如来の招喚すなわち三心招喚の文となる。

至心信樂欲生の三心全体が招喚の如来にある。しかしもし、「欲生我国というは他力の至心信樂をもて安樂浄土に生まれん」で切れば、行者の信心の上に三心はある。三心招喚の全体がそのまま三心即一の行者の信となるのである。いま成就文では、信樂を行者の上に、至心欲生（至心廻向）を如来の上において説かれるのである。本願三心機受一心の趣を表するに便なるがためである。

願生彼国

「至心二廻向シタマヘリ 彼国二生レント願ズレバ 即チ往生ヲ得 不退転ニ住セ
ン」

「諸有の衆生、其の名号を聞いて、信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまえり」と説いてきて次に願生彼国の文字がある。この願生彼国の文字には二つの意義がある。

一にはこの四文字は浄土門の標幟ひょうしほである。

二にはこの四文字は信心歡喜の異名である。

浄土門の標幟

もしこの本願成就文に、「願生彼国」の文字がないならば、とうていこの文は浄土門の成就表現の文となることはできない。次に出てくる即得往生住不退転の文も、この句の限定によりて正しい意味を持つてくるのであり、上の聞其名号信心歡喜も、この文によつて具体的な内容を発見するのである。すなわち信心歡喜も願生浄土の信心歡喜であり、即得往生住不退転も、願生浄土における人格の座の決定であつて、聖道門における悟りの位ではなく、また一益法門におけるこの世での道の完成ではない意味が出てくるのである。

浄土門とは具つぶさには、往生浄土門である。聖道門が此土入証しどをめざすに對比して、彼岸に往生し、往生の過程を通じて往生即成仏の道を生きんとするものが往生浄土門である。したがつてこの願生彼国の四文字は、この往生浄土門たるゆえんを旗幟鮮明にあらわされたる、浄土門の標幟である。

思うにこの世は生死動乱のちまたであり、五濁悪世であり、無明流轉の闇の世である。永久に清浄と眞實を失える顛倒不浄虚仮不実なる煩惱具足の衆生の苦悩の旧里である。この苦、空、無常、無我なる現象界は、火宅そのものである。しかるにかか
る人生への価値判断は、徹底すればするほど必然的に常住清浄なる浄土を彼岸に予想せしめている。

価値は反価値と、穢悪は清浄と、虚仮は真実と、生死は涅槃と、煩惱は菩提と、無常は常住と、矛盾は調和と、無明は光明と対立することが考えられずには、人生の真相に直面し、人生の意味を発見することはできない。かかる生死界の彼岸には、涅槃界たる浄土の真に実在すること、そうしてこの彼岸と此岸とは往還の道路が開かれてあり、われらはこの道に生きることによつてはじめて、すべての問題を根本的に解決することが可能となるのである。この人生の彼岸としての浄土なくして、その浄土の全一なる規範なくして、人生生活は考えられない。この浄土の招喚摂取の原理に乘託して不退転の白道にあらんとするもの、すなわち「願生彼国」の生活である。

信即願

今の願生彼国の文の次には、即得往生住不退転とあり、この即得往生の大益は、実には、信心歓喜の一念のところを得るのである。「一念と言うは信心に二心無きがゆえに一念と言う。これを一心と名づく。一心はすなわち清浄報土の真因なり。」(信巻末)といい、また次に「金剛の真心を獲得する者は、横に五趣八難の道を越え、必ず現生に十種の益を獲……十には入正定聚の益なり。」これら皆、信一念に即得往生住不退転の益を得ることを示されたものである。

しかるに今、成就文においては「彼の国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。」とあつて、即得往生が、信心歓喜乃至一念に結びつけてない。これはいかに考うべきであるか。

答えていわく、信心歓喜と願生彼国とは、名は変わつても、その体は一つであるがゆえである。信心歓喜即得往生は、願生彼国即得往生である。すなわち、信はそのま願である。信は願生彼国であり、願作仏心である。信が浄土に望むれば、願生彼国であり、仏に望むれば、願作仏心である。信は願を展開する。信が信自体を転じて、願とすることができないならば、信は正しい信ではないのである。

仏願の信は、純粹であり真実である。全く無功利なる信、清浄真実なる信、かかる信の動的相は願である。願は彼岸に向かつて尋道直進するところの白道そのものである。であるから、信はただ漫然たる信ではなく「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんと思ひ立つ心」(歎異鈔)である。願生浄土における信心決定である。

善導大師は、廻向発願心積において、「廻向発願して、願生する者は、必ず決定して真実心の中に廻向したまえる願を須いて得生の想を作せ。この心深信せること、金剛の若くなるによりて……」と釈せられた。「得生の想を作せ」とは、願生彼国である。この願生浄土の心において金剛の深信はあるのである。それは真実心の中に廻向したまえる願、その本願力廻向をもちいて、もちいるとは信じて決定したる深信である。がゆえに金剛である。金剛の心は作得生想、願生浄土の意において金剛なのである。生まるることを往生一定と決定したる信心である。であるから、信心歓喜即得往生と願生彼国即得往生とは同一である。体は一つであつて、名が変わつただけである。

しかし同一だからとて、願生彼国即得往生でないならば、往生浄土門の相は出てこないであろう。東京行きの列車に乗って初めて東京行きと決定するのである。南無阿弥陀仏の大行に乗托してはじめて願生道において深信はあるのである。

信の得益

本願名号を聞いて信心歓喜する一念、その一念に「即得往生住不退転」の身となる。これはまさしく信心が得るところの利益である。信のうる得益は即得往生住不退転である。これを『一多証文』に釈していわく、

「即得往生というは、即はすなわちという、時を經ず、日をも隔てぬなり、また即はつくという、その位に定まりつくという語なり。得はうべきことをえたりと言う、真実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御心のうちに撰取して捨てたまわざるなり、撰はおさめたまう、取はむかえると申すなり、おさめとりたまう時、すなわち時日をも隔てず、正定聚の位につき定まるを『往生を得』とはのたまえるなり」と。

この文を読めば、即の言に二義あることが知られる。第一義は、聞信一念同時に往生の大益を得ること。第二義は、不退正定聚の位に即くことである。すなわち、即の字を「すなわち」と読めば、いわゆる「同時即」であつて、聞信の一念同時に、真因業成するがゆえに、時を經ず日をも隔てず、一念同時に往生するのである。いわゆる前念命終、後念即生である。であるから『浄土真要鈔』には、

「しかればすなわち今いふところの往生といふはあながちに命終の時にあらず。無始已来輪転六道の妄業、一念南無阿弥陀仏と帰命する仏智無生の名願力にほろぼされて涅槃畢竟の真因はじめてきざすところを指すなり。すなわちこれを即得往生住不退転ときあらわさるるなり」と。

『執持鈔』にいわく。

「しかれば平生の一念によりて往生の得否は定まれるものなり、乃至平生のとき善知識の言葉の下に帰命の一念を發得せばそのときをもて娑婆のおわり臨終とおもふべし」と。

これらは皆、即得往生の即を同時即と釈せられたのである。また次に即は、即位の義である。

「おさめとりたまう時、すなわち時日をも隔てず正定聚の位につき定まるを往生を得とはのたまえるなり。」

信の一念に無碍光仏の御心のうちに撰取不捨せられる。その時同時に正定聚の位に即くのである。『一多証文』の次の文には、

「この二尊の御法を見たてまつるに『即ち往生す』とのたまえるは正定聚の位に定まるを不退転に住すとはのたまえるなり。」

とあり、みな即位の義と釈せられたのである。しかしこの二義は信一念のところにある二義であつて、事は一つしかあるのではない。

しかるに正定聚といえは、それは十一願必至滅度の願に、

「たといわれ仏を得んに、國中の人天定聚に住し、必ず滅度に至らば正覺を取らじ」

とあって、正定聚は十一願の願事でなければならぬ。けれども今は、十八願の聞信一念に正定聚の位に入るとせられた。この関係いかんというに、『三経往生文類』の初めに、

「念仏往生の願因によりて必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚の位に住して、必ず眞実報土に至る」

とあるよりすれば、十八願は因であつて十一願は果である。二願は因果関係をなすものである。この世で正定聚の位につき、それゆえに不退転に住して、やがて浄土に入つて大涅槃すなわち滅度の証果を開覚することが誓われたのが十一願である。

ところが先に述べるがごとく、聞信の一念に、即得往生住不退転と正定聚の位に入るといわれたのは、信一念の位としての正定聚。そうすると、一つ正定聚が十八願に出、また十一願に出る。両方に出ているのである。願因にも願果にも出しているのである。なぜそうされたか、そうすることが大経の宗教がより明らかになるからである。すなわち十一願は信因によりて生まれる当然の証果を示されたものである。火がついたら(因)火傷して死んだ(果)。それは当然のことである。念仏の信を得たら(因)正定聚の身となり、やがて滅度に至る(果)のであるから、正定聚はまさしく十一願にあるべきものである。

しからばなぜ十八願にも出されたか。それは、十八願のほんとうのすがたを顕わすためである。願文にないものを成就文に出されるのは、本願成就の信心歓喜一念の眞の相、眞の意義を明らかにするためである。火がついたはずのものが少しもやけどしていなかつたり、一刀両断、首の飛んだものが、二度元気で歩いていたりしたのは、火でも剣でもない。火が飛びついたりしたのは十八願であるが、それが事実ならば、ついたりその時同時にやけどする。やけどまでゆかなければ十八願ではない。一刀両断きり下したは十八願、しかしそれが如実であることを示すには、ばたつと倒れて七転八倒までゆかねば明らかには現わせない。

しかし因と果と相望しているならば、信は因であり、正定聚は果である。利剣即是弥陀号と、名号六字を受け取つて大悲光明に摂取されるが十八願であり、それからおこる証果が十一願である。凡夫は因果を顛倒して、結果から考える。しかしいかに往生即成仏の果を求めても、大信決定の人格的革命、内面的な大転回、自力から他力へ、自己肯定から全否定へ、「廻心ということただ一度あるべし」で、この自覚、十八願的自覚の開けてこないかぎり、何ごとも現われてはこない。

したがつて、もし十八願の大信心が聞法精進によつて成就したならば、求めずとも自然に起きてくるのが十一願の世界である。十八願の世界は他力ではあるが、衆生の自らの願求の世界であり、その情意による精進の世界であるが、十一願はそんなものを超えて必然に起きて来る境地、言をきわめていえば、行者自身がこれを拒んでみてもどうにもならない全く十一願力のみものをいう必然の果である。

十八願の世界は、自ら驚きを立て、自分で聞法し自分で困り求め、泣き喜び聞き開いてゆく、そのままが他力十八願である。しかし一度信心決定して正定聚に入り、やがて滅度に入ることとは、行者自身のいかんともできないところの行者自身の果徳であつて、ただ、願力自然の妙用に外ならない。

撰取不捨

本願成就文の即得往生住不退転は、十一願の「定聚に住し」である。正定聚の人となることである。しかし同じことではあつても、十八願成就文の場合には迫るものがある。信ずる一念に、その間髪を入れざる信の一念に、即得往生と、久遠劫来の迷い、六道輪廻の妄業が切斷されるのが信の一念である。

『改邪鈔』には

「しかれば凡夫不成の迷信に令諸衆生の仏智満入して、不成の迷心を他力より成就して願入弥陀界の往生の正業を成ずる時を、能発一念喜愛心とも不断煩惱得涅槃とも入正定聚之數とも住不退転とも聖人釈しましませり。これすなわち即得往生の時分なり。この娑婆生死の五蘊所成の肉身いまだやぶれずといえども、生死流転の本源をつなぐ自力の迷情、共発金剛心の一念にやぶれて、知識伝特の仏語に帰属するをこそ、自力を捨てて他力に帰すると名づけ、また即得往生ともならいはんべれ。」

とあり、「不成の迷信」とは、凡夫の心では金剛の信心は成就しないこと、「たとい清心を発すといえども水に画せるがごとし」とありて、成就しないこと、この不成の迷心に仏智満入して、金剛の信心を成ずる、その一念に「生死流転の本源をつなぐ自力の迷情」がやぶれて、善知識の伝持する仏語に帰する。これ皆聞信一念の端的を明かされたものである。

聞信の一念は、迷いの本源である自力の心を打ちくだかれる一念であると共に、また撰取不捨の一念である。「この行信に帰命する者は、撰取して捨てたまわず、かるがゆえに阿弥陀と名づけたてまつる。」(行巻)、「弥陀如来の撰取不捨の御誓いなくば、また行者の往生浄土のねがい何によりてか成ぜん。」(執持鈔)

全くそのとおり、弥陀とは撰取不捨、この撰取不捨の御誓いによつて、信の一念に、弥陀大慈悲の御心のまん中に撰取されるのである。その時が、即得往生である。觀經の「無縁の慈をもつて諸々の衆生を撰す」である。

ここに大慈悲は、その真実の大病を活現したのである。如来の大慈悲は凡夫のものとなつたのである。凡夫は如来久遠の愛子として大慈悲につつまれたのである。あるがままを、寸分の隔てなく、悪業煩惱のまんま、あるがまんま、燃えさかる火の中に炭を投げ入れたように、炎王光と燃えさかる大慈悲につつまれたのである。大慈悲の問題はここに始めて、行者の上に具体化されたのである。

即得往生と住不退転

思うに、信の一念をもつて、即得往生といい、また『執持鈔』のごとく、「平生のとき善知識の言葉の下に帰命の一念を発得せば、そのときをもて娑婆のおわり臨終とおもうべし。」とあるを聞いて、もしまちがつてすでに往生成仏せるものとする人があるならば、それは恐るべき聖道門への逆転となり、一益法門の異解となる。

われらは自力の迷情を破られても、宿業そのまま肉身いまだ破れず、依然として五濁悪世に凡夫として生きている。そこで注意すべきは、不退転なる文字である。もし

即得往生の文字のみあつて不退転の文字が無かつたならば、大変なまちがいをおこしたであろう。また即得往生の文字がなくて不退転の文字のみであつても、正定聚の真意を知ることができなかつたであろう。

すなわち、即得往生の文字は、救いの完全性を表わされてあつて、信の一念に名号の全一なる価値の全領、如来の真如一実の功德宝海を頂くことによつて、迷いの根源を滅して即得往生する。しかるにその即得往生は不退転に住すで限定される。不退転とは、此岸より彼岸に不退転であり、正定聚より仏果へ不退転であること、そうすれば即得往生の言は、かくの如き、正定聚より大涅槃への、新たな生活の可能性を一念に獲得したことのいわれである。

人生においては果が肯定されてはならない。しかも因は明らかに出されねばならない。親鸞教学の特徴は、在来の浄土門と聖道門とを揚棄して、人生にあくまで正定聚の菩薩位を肯定して、成仏をば彼岸におき、在来の聖道門が成仏を現世しりぞにおくを斥け、また、浄土門が臨終まで流転の凡夫であるとするを捨てて、あくまで信一念をもつて正定聚の位に入ることを明らかにせられたのである。

即得往生して不退転に住する。この即得往生と住不退転とは相互限定する。もし即得往生とのみあつて住不退転がないならば、一益法門と誤り、住不退転とあつて即得往生がないならば、信一念に全一なる名号功德を全領して、前念命終後念即生と業事成弁する平生業成の義を知らぬであろう。信一念に極速円満と、名号の大功德を受け取つて、往生成仏のために微塵も足らぬものなきところに即得往生がある。しかも、その時、弥陀大悲の御心のうちに摂取せられて、再び流転輪廻すること能わぬところに即得往生がある。

弥陀心光中に摂取されたまま、功德大宝海をその身に満足したまま、そのまま命あらんかぎりは生死界におかれて浄土に願生するところに不退転がある。この不退転は、全一なる徳、絶対なる徳を全領したままの不退転であつて、昨日は三分、今日は四分、明日は三分というように、積みかさねてゆく意味を持たない。即得往生そのままの純粹持続の相である。すなわち名号の功德をその身に全領するがゆえに成就するところの不退転、因相より果相への自然必然の不退転、行者はなんらのはからいをも用いないけれども、一度信心獲得すれば、任運無作に、水が海に出ずるが如く、正定聚より滅度へ、生死界より浄土に、念仏相續するままに、自然に往生するのである。これ十一願の力である。

前にも述べたごとく、十八願の聞其名号信心歡喜の世界は他力ではあつても、行者の全精神内容の具体的事実であつて、行者の意識の世界である。二種深信の自覚である。しかるに、十一願の世界は自力のはからいの尽きたところに現われる、行者の意識を超えたる全く願力の天地である。しかもかかる如来の御はからいにて往生する世界にまで出なければ、十八願の信も如実なものではない。であるから、聖人は常に繰り返しまきかえして、「往生はともかくも凡夫のはからいにてなすべきことにて候わず。大小の聖人だにも、ともかくもはからわで、ただ願力にまかせてこそおわしますことにて候え、まして、各々のようにおわします人々はただこの誓いありと聞

き、南無阿弥陀仏に値いまいらせたまうこそ、ありがたくめでたく候う、御果報にては候うなれ、とかくはからわせたまうことゆめゆめ候うべからず。」（末燈鈔）

「わがはからわざるを自然と申すなり、これすなわち他方にてまします。」（歎異鈔）

即得往生住不退転の位に入るも他方であり、その正定聚より大涅槃へ往生成仏するは、凡夫の功利的な思慮分別のはからいから生まれるのではなくて、全く願力自然の御はからいである。